

谷内六郎 昭和の思い出



■谷内六郎 1921年（大正10）生まれ、画家。
 「週刊新潮」創刊（1956.02.19）から59歳で亡くなるまで描き続けた表紙は、1335枚になります。
 また、没後、通巻2000号にあたる平成7年（1995）4月6日から平成9年3月20日号までは、かつての表紙絵の再登板となりました。
 それは週刊誌の表紙だから、ある程度の時間がたつと、まとめてチリ紙交換に出されてしまいます。日本人は、谷内六郎を平気で毎週消費していました。それは本当に贅沢なことなのです。



■こがらしのパレード（右絵）



■朝 -1959.12.21

ミルク色した朝の空、海、川、ボンボン船の音はねむたい朝のとぼりをポッポッと破って行く。毎号表紙を描くのにボクはかなり表紙の効果というものを意識しています、たとえばこの辺に子供の頭を描くと画面がひきしまつて店頭に出した場合リボンが眼につくだろうとか、この色とこの色を組めば印象が強くなるとかいうことです。
 それで今回はひかめずそういう効果というものを考えずに好きなようにやってみました、でも無意識の内にちゃんと効果を頭の中で考えているようです、子供が画用紙にバサバサ描くような自由さがほしいとたえず思っています、すべての子供は天才ですね。



■みかん-1967. 12. 30



暮もあとわずかになると障子張りというのをよくやらされました。昔はたいていどこの家でも障子が多かったので小川などで障子を洗ったりしているのどかな暮の風景を見ました。張ってもすぐに幼い子のいる家では破かれてしまい何となく障子はめんどくさいものです、住いの美しさというのは障子は世界的にすぐれたものだそうですけれど、いそがしいこの頃ではだんだん障子の部屋も少なくなりつつあるようです。プラスチックかビニールのような障子紙が出ている様子です。障子にうつる木の影とか風の音とか時にはサラサラと舞う雪の音とか日本のデリケートな美の感覚はだんだん影を消して行くものでしょう、

やはり古い感覚が好きならせいかぼくなども暮になると障子を張ります、時々メンドウなので画用紙の部分もあります。

■橋本治さんの解説など ～空気の色を描く人～

童心とも郷愁とも関係のない画家である。現実と幻想の境目が無い。上図の鼓笛隊の木枯らしが粉雪のチラシをまく、という発想にいささかの無理もなく自然な発想が自然なまま絵になっているから「そういうものだ」と思うしかない。冬にはこういう景色もありがちだ、と思うしかない。そもそも日本文学も幻想と現実の両方に足をかけている。宮崎駿の世界に通じる・・・曖昧と歌を排除した大人は過剰にファンタジーを求める。

■春・夏・秋・冬・新年・夢・歳時記

文庫版全集としても、題・文とともに季節ごとにまとめられています。 (黒野)

